

「子育て教室」参加者のアタッチメント安定性と心理的支援

松浦ひろみ
(教育学科准教授)

稲塚葉子
(教育学科准教授)

中井由佳子
(こころの相談室主任相談員)

渡部みもえ
(こころの相談室主任相談員)

問 題

本学大学院「こころの相談室」では、開設当初からのテーマであった女性と子どもに対する支援の一環として、また、臨床心理士を目指す大学院生の教育の場として、週1回の子育て教室を開催してきた。2010年度までの9年間の実践と効果については、アンケート調査と事例に基づいて考察し、既に報告した通りである(稲塚・松浦, 2013; 松浦・稲塚, 2013; 稲塚・松浦, 2012; 松浦・稲塚, 2011)。しかし、これらの実践と研究では、参加者母子の特徴を主に臨床的観察によって把握しており、実証的データの裏付けは得られていない。そこで、本研究では、子育て教室参加者に質問紙と投影法による調査を行い、そのアタッチメントの特徴について明らかにすると共に、各参加者の子育て教室における行動観察との関連を検討し、アタッチメントの特徴に応じた関わりについて考察する。

アタッチメントに注目するのは、それが自己や他者を捉える際の枠組みとなり、子どもの情緒や対人関係の発達を左右していく要因として重要であることに加え、母子関係の多様性を整理する視点として有用だからである。当相談室の子育て教室では、Mahler, Pine & Bergman (1975) の分離個体化理論に沿って自我発達の過程を理解するとともに、Bowlby (1969) に始まるアタッチメント理論に基づき、母子それぞれの特徴を考えることにより、関係性へのどのような支援が必要なのかをスタッフで検討し共有している。

アタッチメントの特徴を捉える方法としては、乳幼児期を対象とするストレージ・シチュエーション法 (SSP) やアタッチメント Q ソート (もしくは Q-set) 法 (AQS)、成人を対象とするアダルト・アタッチメント・インタビュー (AAI) などが、実証研究ではよく用いられている(数井, 2012)。しかし、これらの方法は、厳密に統制された手法で利用するにはライセンスが必要であったり、実施に長時間を要したりするため、本研究では利用しにくい。成人を対象とする自己報告式の尺度もあるが、地域に開かれた子育て支援の場である子育て教室では、子どもではなく親自身の対人態度に焦点化するような尺度は利用することが難しい。

参加者の中には、母子の関係性に葛藤があって、子どもに情緒不安定な様子が見られる場合もある。母親が子育ての不安や負担感に悩むこともよくある。しかし、このような場合でも、問題に直面することへの恐れや、育て方を非難されるのではないかという不安などから、個別の相談にはつながらないことが多い。そのため、当相談室の子育て教室では、子育てで出会う困難は誰にでも生じ得ることとして、母子それぞれへの心理的サポートと自然な形での関係調整を試みながら、スタッフとの信頼関係を深める中で、必要に応じて保健所等の他機関につなぐことを心がけている。これは、「心理相談室」の「子育て教室」という二重の枠組みがあることで可能になる、積極的支援にはつながりにくい母子への緩やかなアプローチだと考えられる。従って、本研究においても、母親自身に焦点化

し過ぎるような調査は受け入れられにくく、スタッフと参加者との関係に悪影響を及ぼす可能性があることから、避けたいと考えた。そこで、詳細なタイプ把握が難しかったり、信頼性・妥当性の検証が不十分であったりする問題点はあるが、子どもの日常の様子や母親の持つ親子イメージを問うような方法で調査を実施することとした。

方 法

◆調査時期： 2013年4月～2014年3月

◆調査対象：

2013年度の子育て教室参加者、母子10組。うち7組が前年度以前からの継続参加者であり、新規参加者は3組である。継続参加者のうち1組は第2子出産のため年度途中から産休に入り、年度末の調査に参加していない。また、新規参加者のうち1組は、11月からの途中参加である。さらに、このうち男女1名ずつが、自閉症スペクトラム障害（ASD）の疑いで、当該年度中に療育教室通所を開始している。

◆手続き：

年度初めの4～5月（途中参加者は参加開始時）と、年度末の3月の2回、参加者（母親）に調査用紙への回答を依頼した。回答は、子育て教室実施時間の前後を利用して行われ、所要時間は20～30分程度であった。調査は無記名だが、ID番号により個人が判別可能な形態で実施した。また、調査期間中の母子の様子を毎回参与観察し、相談室スタッフの関わりの様子とともに記録した。調査用紙の構成は次の通りである。

1) フェイスシート

家族構成（性別、年齢、職業）と対象児の生育状況（離乳、定頸、這い這い、人見知り、始歩、初語、排泄自立の時期）、大きなライフイベントを記入してもらった。

2) アタッチメント安定性尺度（以下、AQS 尺度と略記）

子どものアタッチメントの特徴を捉える目的で、数井・遠藤（2005）より、アタッチメント安定性に関する質問項目25項目を使用した。こ

れは、アタッチメント行動を測定するアタッチメントQソート法からHowes & Smith（1995）によって抽出された26項目に基づき、安治（1996）が作成したもので、次の4つの下位尺度から構成されている。

- ・〈安全基地〉養育者への近接を維持しようとしたり、探索行動の合間に養育者への近接を繰り返す行動。
- ・〈接近接触〉養育者との身体的接触を求め、またそれを喜んで受容する行動。
- ・〈従順〉養育者の要求や制止、注意に沿った従順な行動。
- ・〈不信回避〉自分の要求がすぐに実現されないとき養育者を信頼して待つことや我慢することができない、養育者に対するネガティブな情動の制御がうまくできないといった、養育者への信頼感の欠如を表す行動や、他者からの働きかけに対する社会的反応性が低く、他者を回避する傾向。

対象児の日常の様子について、「あてはまらない」～「あてはまる」の5段階評定で回答を求めた。

3) 親子状況ピクチャー（以下、PARSと略記）

母親のアタッチメントの特徴を捉える目的で、久保（2000）の考案したアタッチメントの投影的測定法PARSを使用した。これは、アタッチメントを活性化するような日常的でストレスフルな親子場面刺激画に対して物語作成を求めるものである。北川・松浦（2008）の8場面から、Kitagawa, Iwamoto, Kazui, Kudo, Matsuura & Umemura（2014）にならい、表1の4場面を使用した。刺激画に対し、「状況」「登場人物の気持ち」「続き」の自由記述を求めた。

表1 PARS 刺激画4場面

場面1	母親への後追い
場面2	座り込んで駄々をこねる子どもと母親
場面3	1人である子どもが地震に遭遇
場面4	両親の帰宅と迎える子ども

結果と考察

1. 調査結果

1) 対象者の属性

初回調査時の母親の年齢は31～41歳（平均35.3歳）、全員が専業主婦であった。子どもは、男児5名、女児5名、年齢は初回調査時1歳0ヶ月～3歳0ヶ月（平均2歳0ヶ月）、第1子が6名、第2子が3名、第5子が1名であった。

生育状況については、始歩が1歳3ヶ月より遅い子どもが2名、初語が1歳6ヶ月以降である子どもは6名、人見知りはなかったとする記述が6名と、定型的な発達指標から外れる回答が比較的多かった。参加の動機が発達に関する心配である参加者はほとんどないのだが、結果としてこの年度の参加者には、緩やかな発達、典型的ではない発達を示す子どもが多く含まれていると言える。

ライフイベントに関しては、転居、アレルギー、身体疾患等が記述されていたが、アタッチメントに大きく影響すると予測されるようなライフイベントの記述は見られなかった。

2) AQS 尺度

「あてはまらない」を1点～「あてはまる」を5点（〈不信回避〉については逆転）として得点化し、各下位尺度と全尺度の1項目当たりの得点を算出した。平均値と標準偏差は表2の通りである。

表2 AQS 尺度得点 (SD)

	初回 (N=10)	第2回 (N=9)
安全基地	3.23 (.64)	3.02 (.75)
接近接触	4.35 (.39)	4.52 (.28)
従順	3.42 (.58)	3.80 (.49)
不信回避	3.08 (.52)	3.11 (.63)
合計	3.52 (.33)	3.61 (.43)

全尺度の得点が3点以上であれば子どものアタッチメントが安定傾向であるとされる（数井・遠藤，2005）が、本研究の対象者は、2回の調査ともに全員3点以上であった。母親を安全基地として外界を探索し、母親との接触を好

み、適度に従順で、ネガティブな情動に対する耐性と社会的反応性をほどほどに示す、安定したアタッチメント行動が見られていると考えられる。

自閉症の子どもはアタッチメント形成に遅れや特異性を示す場合が多いことが知られているが（別府，2007）、本研究対象児のうちASDの疑いのある子ども達は、認知発達にそれほど大きな遅れが見られないこともあり、少なくとも初回調査時点では既に、母親に対する安定したアタッチメント行動を示していると言える。声かけや抱っこといった通常の接触以外で母親から得られる感覚的な刺激を安心の拠り所としたり、物や場所によって安心感を得る傾向が強かったりするような特異性は、行動観察の中で見受けられたが、そのような特徴はAQS尺度得点には表れにくいと考えられる。

対象者数が少なく、統計的検討は困難だが、安治（1996）のデータを標準として比較を試みる。安治（1996）では、1～6歳の保育園児をもつ母親1198名を対象に調査を実施している。そのうち、1～3歳児432名分の結果（1項目当たりの得点にしたもの）を表3に示す。

表3 安治（1996）のAQS 尺度得点

	1歳	2歳	3歳
安全基地	3.44	3.30	3.07
接近接触	4.23	4.34	4.28
従順	3.62	3.73	3.63
不信回避	3.15	3.20	3.22

本研究と安治（1996）のAQS尺度得点に、特に大きな差があるようには見えない。強いて言えば、本研究の1回目の〈従順〉得点がやや低めで、2回目の〈接近接触〉がやや高めであろうか。専業主婦である本研究の対象者が、2歳前後の我が子の不従順により手を焼き、年齢が上がってもより近い距離感を感じていたとしても不思議ではないが、そのような違いが実際に見られるのかどうかは、より多くの対象者で検証する必要がある。

安治（1996）では、〈安全基地〉で1、2歳

が3歳より高く、〈従順〉で女兒が男児より高いという年齢差と性差が見られていた。本研究では、初回の平均年齢が2歳0ヶ月、第2回が2歳11ヶ月であるため、年齢による違いを確認することは難しいが、〈安全基地〉得点は下降傾向にあり、標準的な傾向に一致している。〈安全基地〉行動は、情緒的対象恒常性の成立に伴い減少するため、分離個体化の過程が順調に進行していることが示唆される。

〈従順〉得点については、本研究では、初回が男児3.63、女兒3.20、第2回は男児3.97、女兒3.58と、いずれも男児の方が高く、標準とは逆傾向であった。女兒の従順さには、気質的な穏和さや伝統的性役割観に沿った周囲の働きかけが影響すると考えられているが、20年の経過で子育てのあり方が変化したのか、本研究の対象者特有の傾向なのか、これも対象者を増やして確認することが必要だろう。

3) PARS

2回分の回答をランダムに並べ替え、個人や時期が特定できないようにした上で、北川・松浦(2008)の分類基準に従い、各場面への反応を、〈状況の典型性〉〈子どもからの発信の種類〉〈大人からの発信の種類〉〈ストレスの有無と解決〉〈人物設定〉の5つの観点から評定した。分類基準は、各場面50～55種類の評定値で構成されている(典型的状況の種類数が場面によって異なるため幅がある)。2人の評定者が独立して評定したところ、一致率は93.7%であった。不一致箇所については、協議により評定値を決定した。

各場面の評定値を更に、北川・松浦(2008)の代表的カテゴリーに分類した上で、Kitagawa et al. (2014)の不安定指標が全場面で幾つ出現しているかを数えた。これは、代表的カテゴリーから外れる評定値を中心とする、特に強い葛藤を表現したり、逆に葛藤を回避したりする反応、或いは奇妙な少数反応など、不安定なアタッチメントが推測される反応の指標である。

不安定指標の平均出現数は、初回1.2(0～3)、第2回1.4(0～7)であった。これも統計的検討は不可能だが、Kitagawa et al. (2014)

の介入前の値2.33に比べるとやや低めの値である。Kitagawa et al. (2014)では、母親に対する心理教育プログラムを中心とする介入を行っているが、対象者6名中5名が介入前のAAIで不安定なアタッチメントであると判断されている。本研究の対象者は、それよりは安定傾向なのではないかと推測される。或いは、1年以上の継続参加者が多いことから、不安定だったとしても改善が見られたことの表れと考えられるかもしれない。2回目の不安定指標が7と非常に多い(それ以外は全員0～3)参加者がいることから、各参加者のアタッチメントのタイプについては、行動観察を踏まえて今後詳しく検討する必要があるだろう。

4) AQS 尺度と PARS の関連

調査時期と参加者別のAQS尺度得点とPARSの不安定指標数を表4に示す。

表4 参加者別 AQS 尺度得点と PARS 不安定指標数

初回 年齢	初回		第2回	
	AQS	PARS	AQS	PARS
3歳前半	3.88	0	3.65	0
2歳後半	3.12	0	3.15	1
2歳後半	3.77	3	3.69	2
2歳前半	3.15	0	3.08	0
2歳前半	3.04	2	3.96	1
1歳後半	4.00	1	4.31	7
1歳後半	3.42	2	3.08	1
1歳後半	3.42	2	3.35	0
1歳前半	3.77	0	3.92	1
1歳前半	3.38	2	-	-

全体として、AQS尺度得点とPARSの不安定指標の間にはっきりとした関連は見られなかった。1つだけ目立ったのは、PARSの不安定指標が飛び抜けて多い参加者のAQS尺度得点が高かったことである。AQS尺度得点が4点以上なのはこの参加者のみであり、中でも〈安全基地〉〈従順〉の高さが顕著であった。AQS尺度得点は子どものアタッチメント安定性の指標であるが、本研究での評価者は母親であり、その意味で、母親

の特徴を反映している面もあると考えられる。子どもが頻繁に探索から戻ってくると感じることは、子どもの従順さを高く評価することには、子どもへの対応に負担を感じていたり、葛藤と向き合うことの難しさが隠れていたりする場合もあるのではないだろうか。これについては、行動観察の結果と合わせて考察する必要がある。

2. 行動観察との関連

参加者別の AQS 尺度得点の推移から、2 回とも相対的に高得点、高得点からの低下、低得点からの上昇、2 回とも低得点、というパターンが考えられた。これらのパターン毎に、調査結果と母子の行動観察との関連、及びスタッフの関わりについて考察する。

1) 高得点維持のパターン

AQS 尺度得点が 2 回とも高得点であったのは 2 名だが、行動観察からはそれぞれ異なる特徴が見られた。

初回調査時 1 歳前半の子どもは、非常に慎重な性格で場所や人に慣れるのに時間を要するところがあり、参加当初は母親を唯一の拠り所としている姿が見られた。母親は、そういう子どもを温かく受け入れながら、子どもが少しずつ外界へ出ていけるように促していた。回を重ねるごとに子どもも徐々にスタッフと遊べるようになり、母親と離れる時間も増えていった。そうすると、母親を安全基地として母親の元へ戻ることが頻繁に出てくるようになり、母親もそれを好意的に受け止めていた。反面、母親は子育てや子どもの教育に関して、こうありたいという明確な思いを持っており、距離の近い母子関係の中で、子どもがやや自律性を発揮しにくくなっている様子も見られた。こうした特徴が、AQS 尺度得点の高さに表れていると考えられる。子どもには、教室やスタッフにゆっくり慣れて探索行動に踏み出せるように働きかけていくと同時に、母親に対しては、理想の子育てをしようとする際に生じてくる不安や葛藤について話せる場を提供しながら、母親の中にある規定枠を少し緩められるような、安心感を得られるような関わりを心がけた。

一方、初回調査時 1 歳後半の子どもは、エネルギーが高く活発で、参加当初から全く物怖じせず、勢いよく探索を楽しみ、スタッフにも親和的に関わっていた。母親は、几帳面な性格ゆえ子育てについてもきちんとしてはという思いが強く、活発な子どもが周囲に迷惑をかけることを心配して目を離せなかったり、尽きることをない子どもの要求に応えきれなかったりして、疲弊している姿が見られた。だが、評価懸念からか、母親自身から子育ての難しさを訴えてくることは少なく、母親の抱えているしんどさが表に出てきにくい様子がうかがえた。子どものアタッチメント安定性の指標である AQS 尺度得点が 2 回とも高得点でありながら、PARS の不安定指標が飛び抜けて多かったのがこの参加者である。行動観察で見られた、母親が子どもとの密着した関係に負担を感じていることや、あるべき姿にこだわり実態を受け入れにくい様子が、この結果にも示されているといえよう。子どもから常に離れず、行動を制止しようとする母親の姿が目立ったため、子どもにはできるだけスタッフが個別につくようにし、母親に対してもスタッフから意識的に声をかけ、日々の子育ての中で困っていることや苦慮していることについて話せる関係作りに努めるとともに、具体的な対処法や発達個人差について伝えながら、子どもの探索を見守る体験をしてもらえるようにした。

2) 得点低下のパターン

AQS 尺度得点が極端に低下した参加者は見られなかったが、1 回目の平均的な得点から 2 回目に低下した参加者はあった。初回調査時 1 歳後半のこの子どももエネルギーが高く、遊びの様子からは豊かな内面を持っていることがうかがえたが、その豊富なエネルギーをまだ自分ではコントロールしきれない部分があり、それがときに衝動的な行動として現われてしまうこともあった。そんな子どもに対し、母親は情緒的応答性が高く、受容と厳しさの適度なバランスをもった関わりが見られていたのだが、年度途中で家庭環境の変化があり、そのため母親が子どもに関わることのできる時間が減少した。

それに反応したように子どもの行動面における激しさが目立つようになり、母親が子どもとの関わりに負担を感じるが増えてきていた。AQS 尺度得点の減少は、そのような状況の反映であることが推察される。教室参加時には、子どもにスタッフがつくことで、母親が子どもの行動に気を張らずに過ごせる時間を作るよう心がけた。また、母親から他の参加者やスタッフに気軽に話しかけてくることも多く、そのときどきの子育ての困難さや迷いを率直に語る中で、母親自身が教室を息抜きの場として活用しながら、安定を図っている様子が見られた。

3) 得点上昇のパターン

AQS 尺度得点が1回目の低得点から2回目の高得点へと上昇した参加者もいた。初回調査時2歳前半のこの子どもは、どちらかと言えばひとり遊びを好んで他児の関わりを嫌がり、母親の陰に隠れておもちゃを独占しようとしたり、母親に対して頑固に要求し続けたりするなどの自己主張の強さが目立っていた。母親は、子どもの社会性や頑固さについて心配しつつも、きょうだい兄の方が手がかかるため、この子どもの自律性を好ましく感じている面もあり、強く介入する姿勢は見られなかった。3歳が近付くにつれ、他児の遊びに興味を持って自分から関わりに入ったり、他児とおもちゃを共有したりするなどの変化が見られるようになった。また、排泄の自立もあってか、母子葛藤も減少していった。こうした子どもの成長にともなって、AQS 尺度得点も上昇したのではないかと考えられる。この母子に対しては、子どもと他児との間をスタッフがとりもって、遊びを共有できるように関わりを続けた。また母親には、きょうだい兄も含めた子育てへの不安に寄り添って話に耳を傾けるとともに、子どもの遊びへの関わりを少しずつ促すようにした。

4) 低得点維持のパターン

AQS 尺度得点が2回とも相対的に低得点だったのは9名中2名であった。

初回調査時2歳前半の子どもは、人との関係の築きにさやこだわりの強さ、発達の全般的な緩やかさなどの発達障害的な特性を抱えてい

て、そのために AQS 尺度得点が他の参加者に比べて低めであることが考えられた。こうした発達的特性を持ちながらも安定傾向とされる3点以上を示しているのは、PARS の不安定指標の少なさにも見られるように母親のアタッチメントが安定傾向であり、情緒的応答性が高く、周囲の助言もとり入れて、子どもに合わせた積極的な働きかけをされていたことによると思われる。入室を嫌がったり、設定遊びに乗りにくいところもあったこの子どもに対しては、子育て教室が安心できる場となるよう、設定遊びに加えてこの子の好きな遊びを準備したり、他の参加者と離れて母親と1人のスタッフとだけで過ごせる空間を作るなどの配慮をした。母親とは、発達に関する不安を受けとめ、教室や家での関わり方を話し合い、他の専門機関へとつなぐとともに、他児との違いから居心地の悪さを感じなくて済むように心をくばった。

もう1名、初回調査時2歳後半の子どもには、発語の少なさや、表情の変化や感情伝達のとぼしさ、他者への働きかけや他者からの働きかけへの反応の少なさなど、情緒的な発信の弱さが見られた。母親の側にいることで安心感を得てはいるが、接触やアイコンタクトなどの交流は少なかった。母親は、どしりと安定感があり、必要な手助けはされるが、情緒的な表現はごくあっさりとしていた。また、家庭の事情から、この子どもへの関わりが少なくなっている時期でもあった。こうした特徴が、AQS 尺度得点の相対的な低さに表れていると推察される。この母子に対しては、スタッフが子どもと1対1で関わり、情緒的な発信を引き出し強化するとともに、子どもが示す母親へのアタッチメント行動をていねいに受け取って母親につなげるようにしたり、母親と一緒に遊びを楽しめるように心がけた。その結果、発語や表情の変化、イメージを表現する遊びが増え、母親に抱きついたり甘えたりするような姿も見られるようになっていった。

以上のように、全体として安定傾向のアタッチメント行動が示されていても、母子関係の様相や支援のあり方は様々であった。AQS 尺度

得点が相対的に高得点の場合は密着的な母子関係や母親の側の過剰な関与などの傾向、低得点の場合は母子間の距離や子どもの自律性の推奨といった傾向が見られるような印象を受けるが、より多くの事例での検証が必要である。また、AQS 尺度得点の短期的な変化には、家庭環境や子ども自身の全般的な成長などの要因も関係していると考えられるため、支援の効果を検証するには別の方法が望ましいかもしれない。

3. 総合考察

本研究では、子育て教室参加者（母親）に AQS 尺度と PARS を実施し、教室での母子の行動観察と照らしあわせ、参加者のアタッチメントの特徴について検討し、子育て教室での支援の実際について述べた。以下で、全体のまとめと今後の課題について考察する。

結果でも述べたが、本研究の対象者（子ども）は、初回調査時と年度末の2回の AQS 尺度得点から、全体的には安定したアタッチメント行動が見られていると考えられる。データ数が少なく統計的な検討は難しいため、ここでは相対的にみた2回の AQS 尺度の得点における推移から、4つのパターン（2回とも高得点、高得点から低下、低得点から上昇、2回とも低得点）を取り上げた。そして、AQS 尺度の得点推移のパターンが同じ場合でも、母子により異なる関係性の特徴が見られ、得点の背景となる要因が異なることを行動観察において示した。

今回の結果の中で、AQS 尺度得点が2回とも最も高かった母子において、PARS の不安定指標が顕著に高い例が見られたことは着目に値する。AQS 尺度は、母親自身が認知する子どものアタッチメント行動について測る尺度である。この母子の場合、子どもとの関わりに対する母親の負担感が大きいことが一つの要因となり、子どもが頻繁に探索から母親の元に戻るといった評価がなされて、AQS 尺度得点が高くなったことが想定される。AQS 尺度の得点の高さが、必ずしも安定した母子関係の指標とはならない場合もあることが示唆される。

母親が子どもとの関係における葛藤を感じて

おり、関係性の改善を目指した心理教育を積極的に求める者を対象とした研究（kitagawa et al., 2014）とは異なり、子育て教室への参加者の場合、母子の関係性に明らかに葛藤が見られる場合でも、母親は子育ての不安や負担感を感じていても、それを関係性の視点では意識していない場合が多い。関係性の課題への直面化を促すことは、母親の不安や負担を増長し、子育て教室が母子にとって安心できる場ではなくなり継続参加を困難にしてしまうことも懸念される。地域援助の一環として心理相談室が主催する子育て教室という場の特性を考えると、母子それぞれに心理的サポートを行い、スタッフとの信頼関係形成を基盤に、自然な形で母子の関係調整を目指す支援が重要と考えられる。

今後、母子のアタッチメントについての測定方法の再検討が必要であろう。例えば、AQS 尺度を用いてスタッフ等が行動観察から評定する方法や、親以外の第三者が評定する前提で作られた測度を用いることが考えられる。後者では例えば、アタッチメント Q ソート法（近藤, 1993）等が考えられるが、教室で実施する場合、集団場面で複数の母子やスタッフがいる状況での評定になるため、母子の関係性に多様な要因が絡み、評定の信頼性を保つには困難が伴うという限界も予想される。

また、本研究では、安治（1996）の保育園児とその母親を対象とした研究データを基準に、AQS 尺度の得点の検討を行った。幼稚園入園までは母親が主たる養育者として全面的に育児に携わる専業主婦家庭と、母親が就労している保育園の家庭では、母親の育児に対する負担感や育児不安感も異なってくる（八重樫・小河, 2002）。安治（1996）の研究時から、時間的経過もあり、子育てや母子関係に関する社会通念の変化も考慮せねばならない。今後、専業主婦家庭を対象に標準データを新たにとる必要があると考えている。

更に、アタッチメント以外の視点から母子関係の変化を測定できる方法の検討をすることも必要である。例えば、日本語版 Parenting Stress Index (PSI)（兼松・荒木・奈良間・白

畑・丸・荒屋, 2013) を用い, 母親の育児ストレス (子どもの特徴に関わるストレスと親自身に関するストレス) を調べることなどが考えられる。

本研究は, 子育て教室への単年度の参加期間のデータをもとに行ったが, 子育て教室への参加期間 (1年～数年) に, 母親の子どもに関わる姿勢や意識, 母子の情緒的な相互交流のあり方に大きな変化が認められ, 子どもに顕著な発達が見られるケースも少なくない。個別の事例に沿って, 母子の関係の様相とその変化過程を詳細に検討し, 母子関係の特徴と支援の方法, 介入の時期などの可能性について探ることが必要である。

上記のように課題は多いが, 子育て教室参加者への実証的調査を今後も継続していくことによって, アタッチメントを始めとする母子関係の特徴や, 教室への継続参加による母子の関係性への影響 (社会資源としての子育て教室参加の効果) についても検討したいと考えている。

引用文献

- 安治陽子 1996 幼児期における愛着の組織化と社会的適応—漸成的組織化は可能か—. 東京大学大学院教育学研究科修士論文。
- 別府哲 2007 障害を持つ子どもにおけるアタッチメント. 数井みゆき・遠藤利彦 (編著) アタッチメントと臨床領域, 59-78, ミネルヴァ書房。
- Bowlby, J. 1969/1982 Attachment and loss, Vol. 1: Attachment. New York: Basic Books. (黒田実郎・大羽葵・岡田洋子・黒田聖一 (訳) 1991 新版 母子関係の理論 I: 愛着行動. 岩崎学術出版社.)
- Howes, C. & Smith, E. W. 1995 Children and their child care caregivers: Profiles of relationship. Social Development, 4, 44-61.
- 稲塚葉子・松浦ひろみ 2012 参与観察実習としての「子育て教室」. 京都女子大学発達教育学部紀要, 8, 45-51.
- 稲塚葉子・松浦ひろみ 2013 「子育て教室」における心理的支援(1)—安定したアタッチメントの母子に対する関わり—. 日本心理臨床学

- 会第32回大会発表論文集, 237.
- 兼松百合子・荒木暁子・奈良間美保・白畑範子・丸光恵・荒屋敷亮子 2013 PSI 育児ストレスインデックス手引 (改訂版). 雇用問題研究会.
- 数井みゆき 2012 アタッチメントの実践と応用—医療・福祉・教育・司法現場からの報告—. 誠信書房.
- 数井みゆき・遠藤利彦 2005 アタッチメント (愛着) 障害と測定尺度の作成. 平成14年度～平成16年度科学研究費補助金研究成果報告書 心的外傷経験が行動と情動に与える影響について: 乳児院群と家庭群の比較 (研究代表者: 数井みゆき), 13-35.
- Kitagawa, M., Iwamoto, S., Kazui, M., Kudo, S., Matsuura, H. & Umemura, T. 2014 What element of Circle of Security program is effective? Comparing the quality of parent-child relationship with after they reviewed the tape of themselves. 14th WAIMH World Congress.
- 北川恵・松浦ひろみ 2008 アタッチメントの投影的測定方法開発に関する基礎的研究—成人データからの反応パターンの抽出—. 日本発達心理学会第19回大会発表論文集, 584.
- 近藤清美 1993 乳幼児におけるアタッチメント研究の動向と Q 分類法によるアタッチメントの測定. 発達心理学研究, 4, 108-116.
- 久保恵 2000 愛着表象の投影法的研究—親子状況刺激画を用いて—. 心理学研究, 70, 477-484.
- Mahler, M. S., Pine, F., & Bergman, A. 1975 The psychological birth of the human infant. New York: Basic Books. (高橋雅士・織田正美・浜畑紀 (訳) 2001 精神医学選書③ 乳幼児の心理的誕生—母子共生と個性化—. 黎明書房.)
- 松浦ひろみ・稲塚葉子 2011 心理相談室における子育て支援—「子育て教室」の9年間の実践から—. 京都女子大学大学院こころの相談室心理臨床研究, 5, 3-11.
- 松浦ひろみ・稲塚葉子 2013 「子育て教室」における心理的支援(2)—不安定なアタッチメントの母子に対する関わり—. 日本心理臨床学会第32回大会発表論文集, 238.
- 八重樫牧子・小河孝則 2002 母親の子育て不安と母親の就労形態との関連性に関する研究. 川崎医療福祉学会誌, 12, 219-239.